二〇二六年度 小論文問題 11月1日実施

〈全学部全学科共通問題〉

次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、＊の付いた語句には、文末に注があります。

君たちがさしあたり直面するのは、受験と雇用です。何を勉強したいのか、決めるのは自分です。大事なのは何をしたいかです。学術領域を選ぶ時に、将来的に安定した職業に就けるというような動機では選ぶべきではありません。それだと自分の持っている潜在能力の１００％までしか出せません。１００が上限です。でも、人間は潜在能力の１５０％とか２００％とかまで出そうと思えば出せるんです。自分で想像している以上の能力を発揮できる。そのことに寝食忘れて熱中する。面白くてしょうがないという時に、その人の潜在能力が爆発的に発揮される。そういう分野を探り当てるのが皆さんの仕事です。

先ほど日本の将来が悲観的であることを言いましたが、それをＶ字回復させる可能性を持っているのは、君たちです。君たち一人一人が１００の期待値を１５０や２００にする。それをしてくれたら、日本の再生は実現できます。

実際には自分の能力の１００まで出し切っている人さえそれほど多くはありません。この学校も「いじめ」はあると思いますけれど、それは本当に許しがたいことだと思います。君たちの級友たちは、これから社会を共に支えてゆくたいせつなパートナーなんです。その人たちがいずれ発揮できるかも知れない能力を損なってどうするんですか。追い込んで生きる気力をなくしたり、学校に来なくなったりするのは、同世代全体にとっての損失なんです。だって、この仲間だけでやっていくしかないんですから。競争して、勝った者が「総取り」して、負けた者は何ももらえない。そういう新＊自由主義的な考えと「いじめ」はなじみがいいんです。競争で勝つことだけが大事であるなら、競争相手である同世代の全員が心に傷を負ったり、生きる意欲を失ってくれている方が競争に勝つチャンスは高まる。自分と同学齢の人たちが、自分より無能で無力である方が競争では有利になる。ですから、新自由主義的な競争になじんだ人たちは、無意識的に、ほとんど自動的に、周りにいる人間の生きる意欲を損なうようなふるまいをする。別に悪意があってやっているわけじゃないんです。それがもう自然になっている。

ですから、一握りの勝者がいて、あとは累々たる敗者の屍……という競争社会は集団としてはとても弱いものになる。集団として生きる力が衰えてゆく。

君たちがこれから迎える時代は本当に厳しい時代です。お互いに足を引っ張り合う競争なんかしている暇はありません。そんなことをしていたら共倒れになる。周りを見渡して、隣にいる人がどんな才能を持っているか、どんな資質があるのか、まだ発揮していないどんな力があるのか、それを見出して、どうしたらその才能が開花するのか、それを見きわめることが一番たいせつです。友だちの成長を支援する。そうすることによって、集団としての生きる力を高めてゆく。

人間は一人では何もできません。僕たちが価値あるものを創り出すことができるのはさまざまな人たちと共同作業をすることを通じてです。だから、同世代の仲間が大事なんです。一緒にチームを組んで、共同作業でお互いに手持ちの１００％を超える能力を発揮する。そういう価値創造的な働き方をこれからはしなければいけない。ですから、隣にいる仲間を見て、さあ、どうやったらこの人が機嫌よく働いて、次々と新しいアイデアを生み出してくれるか、それをどうサポートしたらよいのか、それを君たちの世代はまず考えないといけないんです。

僕らの世代は競争的な環境でした。周りを蹴落として出世することが奨励されていた。それが可能だったのは、子どもがいくらでもいたからです。高度経済成長期ですから、勝者が取るだけとっても、まだまだたっぷりと分配する資源が残っていた。本当にそうだったんです。仕事だってそうでした。高度成長期にはいくらでも仕事があった。あらゆる業界が「猫の手も借りたい」くらいに忙しかったんです。だから、「猫の手」程度の社会的能力しかない人間にも次々と仕事は回ってきた。そんな豊かな時代だからこそ、「勝者が総取り」というようなワイルドな競争をすることができたんです。

でも、今は環境が違います。環境が変わった以上、生存戦略も変わります。国民同士を競争させていれば国力が上昇する時期もあるし、そんなことをしたら国が衰退するという時期もある。今の日本には同世代で競争なんかしている余裕はありません。同世代の間で相対的な優劣を競って、足を引っ張り合っていたら、たちまち共倒れする。だから、頭を切り換えなければならない。「競争」から「共生」に頭を切り換えなければならない。

君たちはある意味でもっと利己的になっていいんです。どうやって自己利益を最大化するか、それを考えたら、相対的な優劣を競う暇なんかないということに気づくはずです。競争する人は、周りの人たちが自分より無能で無力であることを願うようになります。自分以外の全員が「バカ」という時に競争優位は安定する。でも、自分以外の全員が「バカ」というような無力で無能な集団が生き延びられるはずがありません。生き延びるためには、できることなら全員がさまざまな分野で有能であることが望ましい。そういう人たちと共同作業するなら、集団全体としては堂々たるパフォーマンスを示すことができる。そういうチームでは誰も競争的なマインドは持たない。自分は誰より優れているのか、自分は誰より劣っているか、そんなことは考えない。だって、そういうチームでは、全員がそれぞれに「余人を以ては代え難い」固有の才能を発揮して

いるからです。固有であるということは比較できないということです。

昔から『荒野の七人』とか『ナバロンの要塞』とか『スパイ大作戦』とか、少数精鋭のチームで困難なミッションを達成するというドラマがありました。喩えが古すぎて、皆さんにはわからないかも知れないけれど、そういう映画やドラマがたくさんあったんです。こういうチームでは、全員が特殊技能の持ち主です。爆弾の専門家、機械の専門家、変装の専門家、外国語の専門家……そういう特殊技能を持った人たちが集まってチームを作る。そんなチームでは、誰も仲間の能力の相対的な優劣を語りません。優劣を論じることができない。全員がばらばらの能力を持っているからです。でも、それが生き延びることのできる集団なのです。そういう人類学的教訓を、物語を通じて僕たちは学んできたのです。皆さんも、これから日本が衰えてゆくという危機的状況を生き延びるためには、そういう集団を作ってゆかなければならない。

「学級崩壊」という異常な事態が以前よく報道されました。今もあるかも知れません。あれは競争的なマインドがもたらしたものだと僕は思います。全員が同学齢集団内部での相対的な優劣を競う競争で自分だけが勝ち残ろうとしたら、学級崩壊するのは必然的なんです。最少の学習努力で競争に勝とうと思うなら、周りの級友たちの学習を妨害するのが最も効率的だからです。だから、立ち歩いたり、話しかけたり、いじめたり、教師の授業を妨げたりして、級友たちが勉強に集中できないような環境を作り出す。たしかに、周りの人たちの学習を妨害すれば、自分の相対的なポジションは少し上がるかも知れません。でも、集団全体としての学力は下がる。連帯感も失われるし、共同作業する意欲も能力も損なわれる。

競争をさせると一人一人が活動的になって、その結果集団全体の力が上がるということも実際にはあります。日本でもアメリカでもそういう時代はありました。でも、そういうことができるのは、社会が豊かで、分かち合う資源が潤沢な場合だけです。でも、これからはもうそういう時代ではありません。歴史的環境が変わると、生き方も変わる。これからは競争から共生へ、生き方を変えなければならない。これは道徳的な話をしているわけではありません。そうではなくて、そうしないと生き延びられないという非常に生々しい話なんです。

（内田樹『どうしたらいいかわからない時代に僕が中高生に言いたいこと』）

〔注〕＊1　新自由主義……政府などによる経済に関する規制の最小化と、経済における自由競争を重んじる考え方。規制や過度な社会保障・福祉・富の再分配は政府の肥大化をまねき、企業や個人の自由な経済活動を妨げると批判し、市場での自由競争により、富が増大し、社会全体に富が行き渡るとする。つまり、大企業や資産家などがより富裕化することを是認し、それらによる投資や消費によって、中間層・貧困層の所得も引き上げられて、富が再配分されるとするのである。しかし、自由競争の結果、富は再配分されることにはならずに、富の一部における集中や蓄積・世襲化が進み、貧富の格差を広げることになるとする批判がある。また、自由競争に敗れて貧困化してしまった者について、そうなったのは「自己責任」であるとする新自由主義の考え方に対する批判もある。

設問Ⅰ　この文章の内容を要約しなさい。（三〇〇字以内）

設問Ⅱ　この文章の内容を踏まえて、自分の考えを述べなさい。（五〇〇～六〇〇字）